



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	権左武志教授の経歴と業績
Author(s)	辻, 康夫; Tsuji, Yasuo
Citation	北大法学論集, 73(6), 191-204
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88689
Type	other
File Information	lawreview_73_6_08_Tsuji.pdf



権左武志教授の経歴と業績

辻 康 夫

1. 経歴

権左武志教授は、2023年3月31日をもって、北海道大学大学院法学研究科の定年を迎えられる。

権左教授は1984年3月に東京大学法学部を卒業され、1986年3月に北海道大学大学院法学研究科修士課程を修了された。1989年4月に同博士課程を単位取得退学され、同年5月に北海道大学法学部助手に採用された。1990年7月から1992年7月まで、ドイツ連邦共和国・ポッフム大学ヘーゲル・アルヒーフに客員研究員として滞在し、帰国後の1993年6月に北海道大学から法学博士号を取得された。1993年8月に北海道大学法学部助教授(政治思想史担当)に就任され、1998年7月に同教授に昇任された。1999年9月から2000年9月までは、ハイデルベルク大学哲学・歴史学部に客員研究員として滞在された。2000年4月の北海道大学の組織替えに伴って、同大学大学院法学研究科教授となられ、2009年4月から北海道大学大学院公共政策学連携研究部に所属され、2011年4月に再び北海道大学大学院法学研究科に所属され、現在に至っている。

この間、北海道大学法学部・法学研究科では、『北大法学論集』編集委員長や大学院教務委員などを歴任され、全学でも学生委員会委員、教務委員会委員、入試関係の要職等において力を尽くされた。学外では、政治思想学会の理事や日本ヘーゲル学会の理事を長年にわたって務められ、学界の発展に貢献された。

2. 教育

権左教授は、北海道大学の全学教育においては、「歴史の視座」や「一般教育演習」などを、法学部においては「西洋政治思想史」の講義や「演習」などを担

当された。大学院法学研究科および公共政策大学院においては、「現代欧米政治思想」、「現代政治思想論Ⅰ」、「政治思想史学特殊演習」、「政治思想史学特別講義」、「外国語特殊演習」などを担当された。

「西洋政治思想史」の講義は、最初は古代から近代まで、次第に近世から現代まで政治思想の通史をカバーし、難解な議論を明快に解説され、現代の課題を通史的に考える意義を示すことで学生の関心を大いに喚起された。大学院や3・4年生の「演習」では、主としてマキャヴェリからアレントまで思想史の古典的テキストを精読する授業を、1・2年生の「演習」では、主として20世紀の歴史書を多読する授業を展開され、学生および教員の間でも高い評価を得た。全学教育では、文系学生向けに「ナショナリズムと冷戦の歴史」を講義し、現代史の知識が不足したまま大学に入学した1年生の歴史教育に力を尽くされた。

権左教授を慕って大学院修士課程に進学した学生も多く、また、大学院博士課程においても、3名の研究者を主指導教員として教えられ、博士号取得と研究者養成に貢献された。

3. 研究業績

権左教授の研究業績は、(1)ヘーゲルの政治思想の研究、(2)カール・シュミットの政治思想の研究、(3)現代民主主義論の研究に分けることができる。以下、それぞれについて概観する。

(1) ヘーゲルの政治思想の研究

大学院に進学した権左教授が選ばれたテーマは、ヘーゲルの政治思想であった。かつてヘーゲルは、プロイセンと結びついた国家主義的・保守的な政治思想家と見なされてきたが、第二次世界大戦後、その近代的側面が見直され、近代革命や産業革命との関係、アリストテレス以来の西洋実践哲学との関係、近代倫理学との関係などが注目されつつあった。あわせて、ヘーゲルの全集の刊行作業がすすみ、文献学的研究や伝記的研究が飛躍的に進展しつつあった。権左教授はこれら新しい研究の水準をふまえて、ヘーゲル政治思想の体系的な解明をめざされた。初めに取り組みされたのは、『法哲学綱要』にいたるヘーゲル法哲学の発展史の解明である。新たに利用可能になった法哲学講義の講義録や新しい草稿にもとづいて発展史をたどり、これをふまえてベルリン時代の『法

哲学』を解釈し、博士論文を執筆された。その後、新刊の講義録の分析と、ライン同盟改革についての最新の歴史研究を手がかりに、ヘーゲル主権理論についての新たな解釈を提示された。すなわちヘーゲルにおいて、フランス革命のもたらした歴史的断絶は、神聖ローマ帝国の解体とライン同盟改革を通して認識され、これをうけた法哲学講義の主権理論が、『法哲学綱要』に結実するというものである。この成果は、国際的学術誌 *Hegel-Studien* にドイツ語で発表され、高い国際的評価を獲得した。

権左教授がつぎに取り組まれたのは、ヘーゲルの歴史哲学である。権左教授は各年度の歴史哲学の講義録を、未公開のものを含め比較検討しつつ、ヘーゲル歴史哲学に関して以下の新たな知見を発表された。第一に、発展段階説として理解されているヘーゲルの歴史哲学は、文化接触を通じた発展として再解釈しうること、第二に、歴史の目的としての「歴史における理性」の観念が、キリスト教の三位一体説にもとづく精神の概念によって構想されたこと、を示された。さらに第三に、ヘーゲルは、教会財産の没収により教会権力が排除され、人格と所有の自由というキリスト教の本来の原理が実現される運動としてフランス革命をとらえており、このような広義の世俗化の過程として欧州近代史を理解していたことを示された。

権左教授のヘーゲル研究の第三のテーマは、体系原理である「精神」の発展史的分析である。その理解によれば、青年期からイエナ初期を経て、『精神現象学』を執筆したイエナ後期に精神概念が初めて定まる。彼にとって、精神概念とは、啓蒙主義とロマン主義、換言するとプロテスタント原理とギリシア精神、の二つを弁証法的に総合したものであり、この総合は、自己反省を通じた自己意識モデルと、キリスト教の三位一体説の受容により成し遂げられたというのが独創的な結論である。

以上の研究成果をまとめた『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』（岩波書店、2010年）は高い評価を受け、2010年度和辻哲郎文化賞・学術部門を受賞している。また、ヘーゲル思想の全体像を一般読者向けに解説した『ヘーゲルとその時代』（岩波新書、2013年）の意義も大きく、長く読み継がれると思われる。これらの研究を通じて、かつての諸解釈に代えて、「啓蒙と革命」というヘーゲル解釈の新たなパラダイムを確立された功績は大きい。

(2) カール・シュミットの政治思想の研究

権左教授は、丸山眞男をはじめ、戦後日本の政治思想研究者の多くがシュミットの議論から決定的影響を受けていることを認識し、丸山によるシュミットの受容と批判を跡づけた「丸山眞男の政治思想とカール・シュミット」(1999年)を発表され、ついで、シュミットの研究を本格的に始められた。

おりしも、シュミット遺稿中の日記帳の解読をもとに、ナチス信奉者としてのシュミットの解釈を根本的に見直す可能性が開かれた時期であった。すなわち、シュミットがワイマール末期のある時期までは、ヒトラーの政権掌握を防止する国家非常事態計画に関与していたことが明らかになった。権左教授は、日記や書簡を使用しながら、ヒトラー政権掌握前後のシュミットの思考をあとづけ、授権法制定後のシュミットがヒトラー支持に転じた原因を分析された。その成果は、「第三帝国の創立と連邦制の問題—カール・シュミットはいかにして国家社会主義者となったか？」(2012年)、「ヴァイマル末期の国法学とカール・シュミットの連邦主義批判」(2015年)にまとめられたほか、シュミット『政治的なものの概念』の翻訳(2022年)や、次の『現代民主主義』にも生かされている。

(3) 現代民主主義論の研究

権左教授の第三の研究業績は、現代民主主義論であるが、その焦点は19世紀から20世紀前半期における民主主義思想の展開にある。権左教授はかねてから、ルソー流の民主主義と全体主義の関係に関心を持たれていたが、ヘーゲル研究やシュミット研究の成果を踏まえて、このテーマの通史的研究を構想された。その成果は、『現代民主主義 思想と歴史』(2020年)にまとめられた。フランス革命に発し、自己決定を重視する民主主義の思想は、内発的ナショナリズムを生み出すが、これに対抗してドイツで生じた外発的ナショナリズムは、啓蒙の普遍主義的価値との結合が弱く、国民の同質性を想定し、歴史主義に結びつく。民主主義に内在する危険を論じるトクヴィルやJ・S・ミルの自由主義思想は、ドイツでは力をもたず、ドイツ・ナショナリズムの強力な磁場の中で、ヴェーバーの指導者民主主義をへて、シュミットの独裁論が生まれる流れが分析される。権左教授は、カリスマの支配や例外状態論の起源・概念化・適用を分析し、議会制民主主義が直接民主主義の神話により崩壊し、ファシズムへ転落する危険と、その克服の方向性を示された。あわせて、歴史認識の断片化の

傾向に抗して、民主主義やナショナリズムのような政治思想史上の重要問題を、学説の発展史を通じて考えることの重要性を雄弁に示された。

以上のように、権左教授はそれぞれの研究領域で大きな業績をあげられたが、これらの研究は、ドイツ史研究会を中心にした学内外の歴史研究者・思想史研究者との研究プロジェクトからの支援を得て行われた。これらが学界の共有財産となって、今後の政治学・政治思想史研究が進むことが期待される。

権左武志教授の経歴

【学歴・職歴】

1959年10月京都府生まれ

1984年3月東京大学法学部第三類卒業

1986年3月北海道大学大学院法学研究科修士課程修了

1989年4月北海道大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学

1989年5月北海道大学法学部助手

1990年7月－1992年7月ドイツ連邦共和国・ボッフム大学ヘーゲル・アルヒーフ客員研究員

1993年6月法学博士号取得

1993年8月北海道大学法学部助教授（政治思想史担当）

1998年7月北海道大学法学部教授（政治思想史担当）

1999年9月－2000年9月ドイツ連邦共和国・ハイデルベルク大学哲学・歴史学部客員研究員

2000年4月北海道大学大学院法学研究科教授（政治思想史担当）

2009年4月北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授

2011年4月北海道大学大学院法学研究科教授（政治思想史担当）

【受賞歴】

2010年度第23回和辻哲郎文化賞・学術部門（受賞作：『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』岩波書店、2010年）

【学会活動】

- (1) 日本政治学会会員
- (2) 政治思想学会：監事（2002-2003年）、理事（2004-2022年）、ニューズレター編集委員（2006-2008年）、企画委員長（2010-2011年）
- (3) 日本ヘーゲル学会：公募論文審査委員（2007-2010年）、国際シンポジウム実行委員（2008-2009年）、理事（2009-2013年）、公募論文審査委員長（2009-2011年）、著作権処理委員会委員（2010年）、調査委員会委員（2011年）

【社会貢献活動】

- (1) 2006年度科学研究費委員会専門委員（2006年度科学研究費補助金・第一段審査（政治学））
- (2) 2007年度科学研究費委員会専門委員（2007年度科学研究費補助金・第一段審査（政治学））
- (3) 2009年5月-2011年5月、財団法人北海道大学クラーク記念財団選考委員会委員
- (4) 2017年度科学研究費委員会審査委員（審査第三部会・社会科学小委員会）

権左武志教授の業績

I 著書

- (1) 『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』岩波書店、2010年、393頁
- (2) 『ヘーゲルとその時代』岩波新書、岩波書店、2013年、248頁
- (3) 【編著】『ドイツ連邦主義の崩壊と再建—ヴァイマル共和国から戦後ドイツへ』岩波書店、2015年、272頁（v-x、92-121、269-271頁執筆）
- (4) 『現代民主主義 思想と歴史』講談社選書メチエ、講談社、2020年、288頁

II 論文

- (1) 「ヘーゲル法哲学講義をめぐる近年の論争(1)」『北大法学論集』40巻5・6号、1269-1305頁、1990年
- (2) 「ヘーゲル法哲学講義をめぐる近年の論争(2)」『北大法学論集』41巻1号、145-176頁、1990年
- (3) 「ヘーゲル政治哲学の生成と構造(1) —ヨーロッパ精神史との関連におい

- て』『北大法学論集』45巻3号、1-62頁、1994年
- (4) 「ヘーゲル政治哲学の生成と構造(2) —ヨーロッパ精神史との関連において」『北大法学論集』45巻4号、91-130頁、1994年
 - (5) 「フィヒテ相互承認論の構造とその意義—『自然法の基礎』(1796 / 97年)を中心として」『理想』655号、110-122頁、1995年
 - (6) 「西欧思想史におけるヘーゲルの国家論—その起源と位置づけ」『思想』1996年7月、865号、28-48頁、1996年
 - (7) 「ヘーゲル政治哲学の生成と構造(3) —ヨーロッパ精神史との関連において」『北大法学論集』47巻5号、195-249頁、1997年
 - (8) 「丸山眞男の政治思想とカール・シュミット(上) —丸山の西欧近代理解を中心として」『思想』1999年9月、903号、4-25頁、1999年
 - (9) 「丸山眞男の政治思想とカール・シュミット(下) —丸山の西欧近代理解を中心として」『思想』1999年10月、904号、139-163頁、1999年
 - (10) 「『歴史における理性』は人類に対する普遍妥当性を要求できるか? —ヘーゲル歴史哲学の成立とその神学的-国制史的背景」『思想』2002年3月、935号、4-26頁、2002年
 - (11) 「『歴史における理性』はいかにしてヨーロッパで実現されたか? —ヘーゲル歴史哲学の成立とその神学的-国制史的背景(続)」『ヘーゲル哲学研究』8号、56-71頁、2002年
 - (12) „Kann ‚die Vernunft in der Geschichte‘ Allgemeingültigkeit für das Menschengeschlecht in Anspruch nehmen?: Entstehung der Hegelschen Geschichtsphilosophie und ihr theologisch-verfassungsgeschichtlicher Hintergrund“ 『北大法学論集』52巻6号、298-270頁、Feb. 2002
 - (13) 「ヘーゲル歴史哲学講義に関する研究報告—クロイツァー論争の影響作用と1830年度講義の近代叙述」『ヘーゲル哲学研究』9号、110-125頁、2003年
 - (14) 「イラク戦争はなぜ『正しい戦争』ではないのか? —イラク戦争の正当性をめぐるハーバーマスの考察」『創文』463号、1-6頁、2004年
 - (15) 「ワイマール期カール・シュミットの政治思想—近代理解の変遷を中心として」『北大法学論集』54巻6号、1-56頁、2004年
 - (16) 「ワイマール共和国の崩壊とカール・シュミット—大統領内閣期のプレレン活動を中心として」『思想』2004年3月、959号、5-29頁、2004年

- (17) 「カール・シュミットの正戦批判—その起源と射程」『創文』477号、19-22頁、2005年
- (18) 「帝国の崩壊、ライン同盟改革と国家主権の問題—ヘーゲル主権理論の形成とその歴史的背景」『思想』2006年11月、991号、4-28頁、2006年
- (19) 「二〇世紀における正戦論の展開を考える—カール・シュミットからハーバーマスまで」、山内進【編】『「正しい戦争」という思想』（勁草書房）、175-203頁、2006年
- (20) „Reichsauflösung, Rheinbundreformen und das Problem der Staatssouveränität: Entstehung der Hegelschen Souveränitätstheorie und ihr geschichtlicher Hintergrund,“ *Hegel-Studien*, Bd. 41 (2006), p. 113-147, 2007
- (21) 「世俗化運動としてのヨーロッパ近代—一八三〇年度ヘーゲル歴史哲学講義における自由の実現過程とその基礎づけ」久保陽一【編】『ヘーゲル体系の見直し』（理想社）、239-259頁、2010年
- (22) 「第三帝国の創立と連邦制の問題—カール・シュミットはいかにして国家社会主義者となったか？」『思想』2012年3月、1055号、41-61頁、2012年
- (23) 「ヘーゲルのエジプト論—特殊な主体性から普遍者の自覚へ」『ヘーゲルとオリエント：平成21-23年度科学研究費補助金・基盤研究（B）・研究成果報告書』、109-114頁、2012年3月
- (24) 「ヘーゲルのロマン主義批判—受容から克服へ」『ヘーゲル哲学研究』18号、33-45頁、2012年
- (25) „Die europäische Neuzeit als Säkularisationsbewegung — Der Realisierungsprozess der Freiheit und ihre Begründung in Hegels Vorlesungen über die Geschichtsphilosophie 1830/31“, in: Ch. Jamme / Y. Kubo (Hg.), *Logik und Realität : Wie systematisch ist Hegels System?*, Fink Verlag p. 259-275, 2012.
- (26) 「日本ナショナリズムの呪縛とその克服—丸山眞男のナショナリズム論とドイツ思想」『現代思想』8月臨時増刊号、64-75頁、2014年
- (27) 「ヘーゲル—啓蒙と革命の間の政治哲学」、犬塚元【編】『岩波講座 政治哲学 2 啓蒙・改革・革命』（岩波書店）223-244頁、2014年
- (28) „Der Bann des Nationalismus. Ein Blick auf Deutschland aus japanischer Sicht“, in : T. Matějčková, R. Mehring, E. Morkoyun (Hg.), *Blicke auf*

Deutschland! Schlaglichter zur Flüchtlingsfrage, Mattes Verlag p. 126-129, 2016.

- (29)「現代日本はヘーゲルから何を学べるか？」『松山大学地域研究ジャーナル』第26号、2-8頁、2016年2月
- (30)「ヘーゲルにおける革命・戦争・主権国家」『ヘーゲル哲学研究』22号、106-117頁、2016年

Ⅲ 翻訳

- (1) ウィリアム・コノリー (翻訳: 杉田敦・斎藤純一・権左武志) 『アイデンティティ\差異』岩波書店、1998年、421頁 (179-293頁執筆)
- (2) エバーハルト・コルプ、ヴォルフラム・ピタ (翻訳: 権左武志・福田宏、解題: 権左武志) 「パーベン、シュライヒャー両内閣における国家非常事態計画」『思想』2004年3月、959号、30-61頁、2004年
- (3) ゲルハルト・シュック (翻訳: 権左武志・遠藤泰弘) 「ライン同盟改革と一八〇〇年前後の連続性問題」『北大法学論集』55巻5号、171-190頁、2005年
- (4) ヴァルター・イエシュケ (翻訳: 権左武志) 「応答: ドイツ観念論における精神概念と神義論—権左氏へ答える」『ヘーゲル哲学研究』12号、28-30頁、2006年
- (5) エミール・アンゲールン (翻訳: 権左武志・小島優子) 「ヘーゲル『法哲学』における主体的自由の権利」『ヘーゲル哲学研究』18号、10-18頁、2012年
- (6) ラインハルト・メーリング (翻訳・解題: 権左武志) 「1933年9月ベルリンのマルティン・ハイデガーとカール・シュミット」『思想』2013年9月、1073号、7-18頁、2013年
- (7) カール・シュミット (翻訳: 権左武志) 『政治的なものの概念』岩波文庫、岩波書店、2022年、293頁

Ⅳ 書評・論説・コメント

- (1) 「2003年12月21日ヘーゲル研究会シンポジウム・コメント」『ヘーゲル哲学研究』10号、87-90頁、2004年
- (2) 「特定質問: ドイツ観念論における精神概念と自由—イエシュケ氏へ問う」『ヘーゲル哲学研究』12号、26-28頁、2006年

- (3) „Wie hat sich 'die Vernunft in der Geschichte' in der europäischen Welt verwirklicht?: Über den theologisch-verfassungsgeschichtlicher Hintergrund der Hegelschen Geschichtsphilosophie“ (Zusammenfassung), *Jahrbuch für Hegelforschung*, Bd. 10/11 (2004/2005), p. 247-248, 2006
- (4) „Forschungsbericht über Hegels Vorlesungen der Geschichtsphilosophie: Unter besonderer Berücksichtigung der Wirkung der Kreuzer-Debatte und der Darstellung der Moderne in Vorlesungen 1830/31“ (Zusammenfassung), *Jahrbuch für Hegelforschung*, Bd. 10/11 (2004/2005), p. 253-254, 2006
- (5) 「ナショナリズムと指導者民主政は個人の主体性を高めるか？—今野元『マックス・ヴェーバー—ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』を読む」『政治思想学会会報』第29号、8-12頁、2009年
- (6) 「書評：遠山敦『丸山眞男—理念への信』」『週刊読書人』2010年9月17日、4面
- (7) 「歴史の探求には何の意味があるのか？—和辻哲郎文化賞を受賞して」『北海道新聞』2011年4月28日夕刊、4面
- (8) 「書評：荻部直『歴史という皮膚』」『週間読書人』2011年7月22日号、3面
- (9) 「書評：山口周三『南原繁の生涯—信仰・思想・業績』」『週刊読書人』2012年12月14日、4面
- (10) 「書評：先崎彰容『ナショナリズムの復権』」『週刊読書人』2013年7月26日、3面
- (11) 「ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル」、杉田敦・川崎修【編】『西洋政治思想資料集』（法政大学出版局）、190-197頁、2014年
- (12) 「書評：杉田敦『両義性のポリテイク』」『週刊読書人』2015年12月11日、4面
- (13) 「書評：熊谷英人『フランス革命という鏡—十九世紀ドイツ歴史主義の時代』」『政治思想研究』17号、458-459頁、2017年

V 学会報告・シンポジウム・講演

- (1) 「西欧思想史におけるヘーゲルの国家論—その起源と位置づけ」、政治思想学会研究会、東京都立大学、1994年5月29日
- (2) 「『歴史における理性』は人類に対する普遍妥当性を要求できるか？—ヘーゲル歴史哲学の成立とその神学的—国制史的背景」、ヘーゲル研究会、法

政大学、2001年9月30日

- (3) 討論者：日本政治学会・分科会 B「主権概念の再検討—政治思想史の視点から」、立教大学法学部、2001年10月13日
- (4) コメント：ヘーゲル研究会・シンポジウム「ヘーゲル『法哲学』の射程」、お茶の水女子大学、2003年12月21日
- (5) 「ワイマール共和国の崩壊とカール・シュミット—大統領内閣期のブレン活動を中心として」、思想史研究会、成蹊大学、2004年2月28日
- (6) 「帝国の崩壊と国家主権の自覚—ヘーゲル主権理論の形成とその背景」、ヘーゲル研究会、お茶の水女子大学、2004年12月19日
- (7) 「二〇世紀における正戦論の展開—カール・シュミットからハーバーマスまで」、一橋大学 COE プログラム「ヨーロッパの革新的研究」第1回ワークショップ「『正しい戦争』とは何か?」、一橋大学、2005年2月21日
- (8) 「一八二〇年以前の法哲学講義と国家主権の析出」、日本ヘーゲル学会シンポジウム「ヘーゲルの国家観再考」、駒澤大学、2005年6月19日
- (9) 特定質問者：イエシュケ氏講演会「ヘーゲルの体系」、日本ヘーゲル学会、法政大学、2005年10月11日
- (10) “Carl Schmitt and the Genealogy of Criticism of ‘Just War,’” *International Political Science Association World Congress, Session: Carl Schmitt’s Significance in the 21st Century* (Fukuoka), paper-giver, 12 p., 11. 7. 2006
- (11) 「カール・シュミットと正戦批判の系譜」、慶応義塾大学院講演、慶應義塾大学三田キャンパス、2006年10月21日
- (12) 「丸山眞男とその時代—『丸山眞男回顧談』から何を学ぶか?」、北海道大学・高等法政教育研究センター主催イブニング・セミナー、2006年11月28日
- (13) 「民主主義思想とその現代的変容」、北海道大学法学部公開講座「市民生活と民主主義」、2007年7月26日
- (14) コメント：シンポジウム「近代日本における国内秩序と世界秩序の秩序構想」、政治思想学会、岡山大学、2008年5月23日
- (15) 「近代民主主義の思想とその現代的変容」、分科会 A1「デモクラシーと権力」、日本政治学会、関西学院大学、2008年10月11日
- (16) „Europäische Neuzeit als Säkularisationsbewegung — Realisierungsprozess der menschlichen Freiheit und ihre Begründung in den Vorlesungen über

die Geschichtsphilosophie 1830/31“, *Internationales Symposium „Wie systematisch ist Hegels System?“*, Komazawa University (Tokyo), 6. 3. 2009

- (17) 「ヘーゲルのエジプト論—実体性倫理からの主体性の析出」、日本ヘーゲル学会第13回研究大会シンポジウム、お茶の水女子大学、2011年6月19日
- (18) 合評会『ヘーゲルにおける理性・国家・歴史』自著紹介、日本ヘーゲル学会第14回研究大会、神奈川大学、2011年12月17日
- (19) 「ヘーゲルのロマン主義批判—受容から克服へ」日本ヘーゲル学会第14回研究大会シンポジウム、神奈川大学、2011年12月18日
- (20) 「ヘーゲル政治哲学における理性と意志—『ヘーゲルとその時代』を再読する」、慶應義塾大学大学院講演、慶應義塾大学三田キャンパス、2014年6月26日
- (21) 「現代日本はヘーゲルから何を学べるか?」、松山大学法学部学術講演会、松山大学カルフルホール、2014年11月14日
- (22) 「ヘーゲルにおける革命・戦争・主権国家」、日本ヘーゲル学会研究大会シンポジウム、中央大学後楽園キャンパス、2015年12月19日
- (23) 「戦後民主主義の思想と冷戦終焉後の変容」、2016年度北海道大学公開講座「[国のかたち]を案ずる時代の知恵」第4回、北海道大学・情報教育館、2016年7月14日
- (24) 「『現代民主主義 思想と歴史』著者の立場から」、日本政治学会2022年度研究大会「いま、デモクラシーをいかに論じるか—書評ラウンドテーブル」、龍谷大学深草キャンパス、2022年10月2日
- (25) 「ホッブズの自然状態論と英国宗教内戦」、北大道新アカデミー・2022年後期講義「リスク・安全・秩序を考える」、2022年11月12日
- (26) 「カール・シュミットの例外状態論とドイツ革命」、北大道新アカデミー・2022年後期講義「リスク・安全・秩序を考える」、2022年11月19日

VI 報告書・報告記事

- (1) 「野村真紀助教授の経歴と業績」『北大法学論集』55巻3号、327-337頁、2004年
- (2) 「二〇〇九年度公募論文審査経過報告」『ヘーゲル哲学研究』15号、181-182頁、2009年

- (3) 「二〇一〇年度公募論文審査経過報告」『ヘーゲル哲学研究』16号、186-187頁、2010年
- (4) 「ヘーゲル1822/1823年「世界史哲学講義」抄訳註」「2.4. エジプト」『ヘーゲルとオリエント：平成21-23年度科学研究費補助金・基盤研究（B）・研究成果報告書』、651-683頁、2012年3月
- (5) 「2011年度研究会企画について」政治思想学会編『変革期の政治思想（政治思想研究第12号）』、482-483頁、2012年5月
- (6) 「自由論題・分科会 A」政治思想学会編『変革期の政治思想（政治思想研究第12号）』、490頁、2012年5月

Ⅶ 研究プロジェクト・外国研究者招聘

- (1) 「一九世紀初期ドイツにおける主権理論の前期的形成とその歴史哲学的背景」、日本学術振興会・特定国派遣研究者、2003年度
- (2) 「国家主権と帝国—ドイツにおける主権概念の歴史的前提と形成に関する多角的研究」、日本学術振興会・科研費補助金・基盤研究（C）、研究代表者、2003-2005年度
- (3) 「帝国モデルと主権国家モデルの理論的—歴史的比較考察：超国家的連邦制の学際的研究」、日本学術振興会・科研費補助金・基盤研究（B）、研究代表者、2007-2010年度
- (4) 「ヘーゲル世界史哲学にオリエント世界像を結ばせた文化接触資料とその世界像の反歴史性」、日本学術振興会・科研費補助金・基盤研究（B）、連携研究者、2009-2011年度
- (5) 「ドイツ連邦主義の連続と断絶に関する多角的研究：ワイマール期を中心とする比較考察」、日本学術振興会・科研費補助金・基盤研究（B）、研究代表者、2011-2013年度
- (6) 2009年3月にエミール・アンゲールン教授（バーゼル大学）を招聘し、日本ヘーゲル学会主催国際シンポジウムや関連社会科学研究会（東京大学）で講演会を開催、成果を翻訳（2012年）で公表。
- (7) 2013年3月にクリストフ・シェーンベルガー教授（コンスタンツ大学）を招聘し、北海道大学法学会、日独法学会（東京大学）、大阪大学法学研究科で講演会を開催、成果を編著（2015年）等で公表。
- (8) 2013年9月にラインハルト・メーリング教授（ハイデルベルク教育大学）

権左武志教授の経歴と業績

を招聘し、世界問題研究所（京都産業大学）、思想史研究会（成蹊大学）で講演会を開催、成果を翻訳（2013年）等で公表。